

タイトル…壁越しの訪問者

著者…桃宮守

あらずじ…ある日、私は出張先で奇妙なノックを聞く。ノック音は確かにしたのに、廊下には誰もいないのだ。イタズラか、はたまた聞き間違いか。そんなふうに考えていたのも束の間、ノックが私に「近づいてくる」。最初は出張先の北海道、次は飲み屋、そして職場、恋人の家……。じゃあ……次は？

アピールポイント…音に焦点を当てたショートショートホラーです。映像化を考えるにあたり、音の描写が映像作品の色を引き立たせることに一役買うかと存じます。

以下本編

私が「それ」に気づいたのは、つい一ヶ月前のことでした。——「それ」なんて大仰な言い方をしたけれど、「それ」とはつまり、ノックです。そう、あの扉を叩く動作のこと。ただ、ノックといっても、かなり奇妙なノックなのです。

初めてそれに出会ったのは、出張先の北海道。自宅があるのは広島なので、慣れない寒さが応えていたのを思い出します。そしてある日。応接室で取引先と話し合っている最中、事件は起こりました。

「コンコン」

ノックの音がしたんです。もちろん、これだけなら何もおかしいことはありません。単純に、誰かの部下か、もしくはお茶出しかと思いました。しかし、問題はその後。取引先の社長が立ち上がってドアを開けたとき、そこには——誰もいなかったのです。社長が困惑しているのを見ながら、私は「誰かのイタズラかな」なんて思っていました。——要するにこの時点では、ノックなんて気にも留めていなかったと言うことです。当たり前ですよ。もしかしたら、イタズラでさえなくて、ただの環境音を聞き間違えた可能性だってあったんですから。因みに先に述べたように、これは北海道での出来事です。

そしてその二週間後。私は北海道から広島へと帰省し、今度は個人的な旅行で福岡へと出かけていました。メンバーは高校時代からの友人三人組。三連休を利用した、二泊三日の旅行です。気の許せる友人たちとの観光はとても楽しいものでした。そして旅行最終日、また事件は起こります。そのとき私たちは旅路を振り返りながら、個室制の飲み屋で昼から飲んだくれていました。あそこは楽しかった、あれは美味かった、なんて言い合っていたときのこと。

「コンコンコン」

そう、またノックです。と言っても、この時も別に、すぐにおかしいと思うことはありませんでした。当然ですが、普通に店員さんが来たのかと思いましたが。ただ、ノック

の音がしてしばらく経っても、ドアが開くことはありませんでした。気のせいかと思いつつ、席的に一番近かった私がドアを開けに行きました。ドアを開けて周りを見渡してみると——やっぱり誰もいません。このとき、初めて北海道の出来事と、今の出来事が少しだけ結びつきました。ノックがあったのに、誰もいない……。私はこのことをその場で友人に話しました。皆酔っ払っていましたから、「気のせい」とか、「イタズラ」みたいな結論には落ち着かず、「半年前の元カレの霊」とか、「一万円借りっぱなしで返してない大学時代の友人の霊」とか、ふざけた憶測ばかりになりました。そんな雰囲気だったので、私も大笑いして、そのときはすぐにノックのことなど忘れてしまいました。そしてこれは、福岡での出来事です。

——もう話の流れで察しているかもしれませんが、その後もさらに、この奇妙なノックは続いたのです。福岡旅行の一週間後、私は広島のおフィスでいつものように働いていました。そして昼休みになりお手洗いに行って、個室に入ったとき。またその音は聞こえてきました。

「コンコンコンコン」

正直、このとき既にかなり怖かったのを覚えています。流石にノックのことは意識し始めていましたし、別に混み合ってもいないトイレで、わざわざ私のいる個室をノックする意味もなかったからです。一応、おずおずと「入ってます」と声を出してみました。案の定返答はありません。トイレが終わった後、急いでドアを開けましたが、やはりそこには誰もいませんでした。私はオフィスに戻り、トイレに一番近い席に座っていた同僚に尋ねました。私がトイレに入った後で、他にトイレに入っていた人はいいたか、と。この問いは、期待と不安が半分ずつ詰まったものでした。ただし、返答は無常にも、私の微かな期待を打ち消します。誰もいなかった、と。

私は本格的に戦慄しつづきました。これまでの例は、イタズラや勘違いで説明がつきましたが、今回の例に関してはどう頑張っても論理的に説明がつかないからです。疲れているのだろうか、精神科に行った方がいいのではないか。そんなことを考えましたが、流石にそれは煩わしくて、とりあえずいつも通りの日々を過ごしていました。その三日後。

私は少しでも不安を紛らわそうと、以前から交際している彼氏の家にいました。彼は少し前に、もともと住んでいたアパートが取り壊しになるというので、折角ならと私の家の近辺に引っ越してきていました。そのため、私の家から彼の家まではせいぜい徒歩二分。気軽にふらっと立ち寄れる場所でした。私たちはその日、二人で一緒にゲームをしていました。わいわいがやがや、時間を忘れて楽しんでいたのも束の間。

「コンコンコンコンコン」

心臓がバクンと跳ね上がります。彼氏は当然ドアを開けに向かいます。お願いだから、ドアの外に誰かいて。普通のノックでいい。——しかしその願望は叶いませんでした。彼がすぐに、「誰もいなかった」と言いながら戻ってきたからです。私は怯えながら、彼にそのような出来事が頻発していることを伝えました。北海道の会議室。福岡の飲み屋。

職場のトイレ。私の口調が冗談めいたものでないことに勘付いてか、彼氏は真剣に耳を傾けてくれました。でも、いくらなんでも全てを信じてくれたわけではありませんでした。特に、トイレでのノックの下りは、「同僚の人が気づかなかったんじゃないかな」などと言いながら、あまり信じていない様子でした。無理ありません。トイレに他に人がいなかったとしたら、超自然的なものでしか説明がつかなくなってしまうからです。むしろ彼氏は、ストーカーの可能性を心配していました。でも、私にはそう言った類のものには思えませんでした。例えばそう、本当に、幽霊のような――。

私はそのまま彼氏の家を後にしました。送っていく、と彼氏は言ってくれましたが、彼の忙しさは重々承知だったので、丁重に断りました。そして、家への道を歩きながら、私は今までノックを聞いた場所について思い返していました。そこで私は、ある法則に気がつきます。

まず、私の家は広島です。そして、最初のノックは出張先の北海道。次に旅行先の福岡。さらに次は広島職場。そして最後に、私の交際相手の家――。つまり、私のより個人的な場所へと、どんどん迫ってきているのです。

段々、近づいている。

もっと言うと、ノックとノックの間の期間についてもそうです。最初は二週間間隔、次は一週間、そして三日。じゃあ――次は？

その事実は、私の心を恐怖で支配するのに十分なものでした。私は半泣きになりながら、家への道を急ぎます。私の家はオートロック付きのマンション。家に入れば、とりあえず安心するような気がしました。私は小走りになっていました。ようやく、建物が見えてきます。エントランスの自動ドアがスーッと開き、体を滑り込ませるようにして急いで中に入ります。自動ドアが後ろでパタンと閉じた音がした次の瞬間、

「コンコンコンコンコン」

全身の毛が逆立ちます。なんで。だれもいなかったのに。私は後ろを見ずに階段を駆け上りました。やっぱり近づいてきている。場所も、時間も。私は息を切らしながら五階に辿り着き、無我夢中で自分の部屋へと駆け込みました。私はドアをボタンと閉め、すぐに二重ロックとチェーンをかけました。玄関を急いで離れ、玄関から一番遠い部屋の隅にうずくまります。私は毛布を頭にかぶって、じっと耳を澄ませました。時刻は夜九時。街の中心部から遠く離れたこの土地は、虫の音や木々の音が微かに聞こえます。そう、音なんてしない。ノック音なんてするわけない。そう自分に言い聞かせながら、しばらく耳を澄ませていましたが、聞こえてくるのは蟬の鳴き声だけ。私は少し冷静さを取り戻していました。でも、とりあえず誰かの声が聞きたい。私は震える手を押さえながら、彼氏に電話しようと、ポケットを弄ってスマホを探しました。……あれ。ない。私はスマホをバッグに入れたままだったことを思い出します。バッグは部屋に飛び込んだ時に、思わず投げ捨ててしまったので、部屋の少し玄関側に落ちていました。私はバッグに近づき、カチ、と取り出し口の留め金を外しました。そのとき。

「コンコンコンコンコンコン」

声にならない声が出ます。ドアを見ます。

「コンコンコンコンコンコンコン」

ドアが振動しています。足がガクガクと震えます。

「コンコンコンコンコンコンコンコン」

インターホンを見ます。誰もいません。

「コンコンコンコンコンコンコンコン」

ドアへと近づきます。そして、ドアノブを握ります。

「コンコンコンコンコンコンコンコンコン」

私は叫びながらドアを開けました。見渡すとそこには——誰もいません。私は後ろ手でドアを閉めました。一応私は、廊下の欄干から軽く身を乗り出して、上下を確認してみました。私が期待していたような、紐を体にくくりつけたスパイみたいな人は、やはりいませんでした。やっぱり、人じゃない。人には不可能です。私はしばらくぼんやりと、夜景を眺めていました。もうノックは聞こえてきません。分らないけど、とにかく明日お祓いに行こう——。そう思いました。私はくると後ろを向いて、改めて我が家のドアに向き直ります。

私は顔が引き攣るのを感じます。そう、家の「内側」から。

「コンコン」